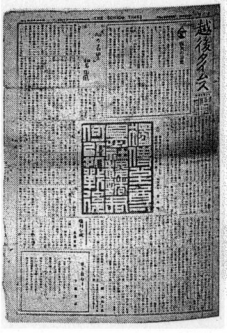
集書日誌

高橋新太郎　学習院女子短期大学教授

品川力と田中角栄
——敗戦直後の越後タイムス

月の輪書林から週刊『越後タイムス』（月2回）を得た。ところどころ欠号はあるが、昭和二十一年一月十三日の復刊号から二十三年十月十日号までである。清貧に生きる野の遺賢ペリカン書房主と、今大闇に擬せられながらロッキード疑獄の被告となった元宰相。対蹠的な人格、生き方を選びとった両者が、地元柏崎を接点として戦後のタイムス紙上に登場する。

品川力翁が、昭和十年代のペリカンベーカリー時代に織田作之助や青山光二らの同人誌『海風』に発行人として加わり、ポオの詩などを訳載したことは知られているが、その昭和十二三年時の「織田作之助氏からの手紙」（1～4、昭和21年10月6日～12月8日）をタイムス紙に紹介し、翌年には「捨身の使者」（2月2日号）と題してその死を悼んでいる。〈昭和十五年に「夫婦善哉」をものし、これが文壇諸家に認められるや、こゝに幾日も幾日も徹夜をするやうな過激な文筆労働が開始されて、いつしか頑健な肉体を所有せざる一個の人間織田作之助はまるで憑かれたやうにして書いて書いて書きまくり、臨終の床に「思ひが残る」と漏らした。……骨を拾つてから、僕が故人の額入りの写真を抱いて、二十人ほどの人々とで二つの自動車で、夕刻築地の一料亭の前に止まるや「あゝここはこの間織田君と酒を飲んだ場所だ、思出が残る」と太宰治が独語した〉。品川力翁は同じく親交のあった内ヶ崎作三郎を追悼した「夕暮の生涯」（上・中・下、昭和22年7月20日～8月3日）も書いている。



一方、東京飯田町に本社を置く田中土建工業株式会社社長田中角栄の名は、昭和二十一年四月の大選挙区連記制による第一回衆院選がらみで広告欄にも多出するようになり、新潟二区では進歩党から立候補した角栄は、地元柏崎市、刈羽郡では最高得票数を得たものの、次点にもとどかず落選する。その際、〈官僚独善、行政機構の根本的改革の断行〉〈法律万能を排し現実に立脚せる能率主義を採用せよ〉等の主張を掲げ、「婦人参政権に就て」の一文も草している。翌年の選挙では、民主党公認で第三区から選出され、石炭国管問題で除名、民主自由党に参加し、二十三年四月には〈政界の麒麟児〉と謳われ、新党の選挙部長として「私の信念」を寄稿している。

幼時内村鑑三の懐に抱かれたことを誇りとし、質素の権化のごとく本郷落第横町でシンプルライフを実践する力翁と、金権体質を国家的規模に押し広げ、権力の頂点を極めた立志伝中の越山田中角栄とは、両者吃音症において共通するものの、その行蔵の評価と支持は、極端に両断されるはずだ。